エッセイ

マイウエイ

笠　日出臣
（放送熊本県芸術文化振興会理事長）

恐らく後遺症と思われる。新聞とテレビから一時も離れられない。半世紀近いメディアの現役から引退してやっと出来た贅沢な自由時間がこんなことになるとは…。

これは、地震前の私の日常であった。朝、顔を洗ったら先ずは地元紙と全国紙を一瞥、世界の時事と解説、識者の論評に自分なりの勝手な解釈を付けてお茶をすする。次に、気になった記事をハサミで切り取る。最後の頁のテレビ欄に行き着いたら面白そうな番組を○で囲む。今度はJCOM誌のページを開いてこれまた○を付ける。その日、散々テレビを見た上で、眠る前にベッドに再び新聞を持ち込んで気になっていた記事をおさらいする。うーん、おさらいは間違い？眠り薬のように読んでいたのかも。翌朝は新聞が枕の左右に散乱していた。切り抜いた記事はいつしか五十㎝位の山になって、流石に年末に処分するようにした。こんなことだから、カミさんは外出ばかりしていたのだろう。

何故こうなったか、話は五十年以上前に遡る。私が放送局に入社して配属されたのは調査・資料部であった。新米の私の仕事の大半は、熊日・朝・毎・読・西日本など主要紙から代表的な記事を選び、日本標準分類に沿って区分けすることであった。勿論、報道部や制作部が閲覧するための作業であったが、私の採用した記事が立派なスチール棚に収納されて先輩たちに利用されることに誇りも感じていた。そして何よりも毎日、「新聞を読むことが仕事」であったことは贅沢と言うしかない。今ほどではないが、各紙の編集や主張の微妙な違いを発見するのも面白い経験であった。また、当時、RKKは熊本県のほか、佐賀県全域、長崎県の島原半島、福岡県の南部を含む広大なエリアを保有していたので西日本新聞のローカル記事は貴重な情報源であった。このように、新聞との関わりはその後の私の企画や提案の原動力となっていたのである。私の依存症ともいうべき職業病は既にここから始まっていたようである。

二〇一六年四月、熊本地震が私を揺さぶった。今までは気付いてなかったが、苦境に負けないRESPECTすべき人たちがこんなにもいたのか。それにつけても自分は何者か、何をすべきか？じっとしていいのか。そこで、家事全般を私にまかせなさいとカミさんに宣言したら、献立表、買い物、料理、洗濯、やることが山ほどあった。分厚い料理の本も買ってきた。あっさりと敗北宣言も癪だから苦しい闘いを続けている。健康のためと称して家を出て頻繁に歩くようにもしている。大きく息を吸って四歩、吐いて四歩したら有酸素運動である。クルマを極力控えてバス、電車を使うと万歩計で二千歩も違う。暇が出来たら電気館にも通う。あとで調べたらキネ旬の一位と三位を観ていたから上等だ。無精者の野良猫が突然、背伸びをして徘徊に出かけるように、私もエクスカーションを始めている。

ある日、かかりつけの病院の帰りに市電に乗った。次の停留所で高齢の男性がステップに足をかけようとしてもがいている。膝が上がらないのだ。障害があるのかも知れない。私は咄嗟にドアまで走って介添えをしてシートに案内した。一分もない僅かの時間だが、そこに奇妙な静寂を感じた。シートに座っていた三十人ほどの乗客は、恐らくスマホでもいじっていたのだろうか、誰も視線を上げないし、まるでロボットが並んでいるように無機質である。私が味わったこの一種の孤独感は一体何なのか。やがて、十分ほどして救われた。私が下車するとき、運転手が「先ほどはありがとうございました」と囁いてくれた。メディアが急速に進化して多くの付加価値を生んでいる。私には到底理解できない、操作も出来ない「新しい脳味噌や臓器」が続々誕生して行く。もはや私のメディアではない。時代に取り残された私の老後の過ごし方はマイウェイである。

カット・中村賢次

エッセイ

言葉に思いを込めて

中島喜久（放送 元熊本放送アナウンサー）

「おっしゃっている意味がわかりません」「キツネにつままれたみたい」。

数年前、熊本市の幼稚園で保護者の方たちに、いわゆる「ら抜き言葉」で「魔法の法則」をお話したときの多くの方たちの感想です。ら抜きことば？魔法の法則？なんのこと？

「ら抜き言葉」とは、文字通り、本来「ら」を入れるべき言葉から「ら」が抜けている言葉です。「食べられる」というべきが「食べれる」、「投げられる」が「投げれる」などです。

この日、美しい言葉を子育てに役立ててもらおうと張り切って出かけました。会場は、若いパパとママでいっぱいです。日頃、気になっていた言葉について尋ねました。「食べられる」と言いますか？「食べれる」と言いますか？

多くの方が「食べれる」派でした。そして、違和感を持たず「ら抜き言葉」を使っておられることがわかりました。その一方で、「ら抜き言葉」に関心はあるが、どの言葉に「ら」が必要なのかわからないという声もありました。

そこで、「ら」が必要かそうでないか、すぐにわかる、ある方法を紹介しました。私が密かに「魔法の法則」と呼んでいる簡単な方法です。

「可能の動詞に『よう』を付けて下さい。その結果、言葉が成立すれば『ら』を必要とする言葉です。」と説明。黒板に具体例を書いていきました。

例えば「食べる」に「よう」を付けます。「食べよう」という言葉が成立します。従って、「ら」を必要とする「食べられる」となります。では、「投げる」はどうでしょう？「投げる＋よう」⬇「投げよう」が成立し、「ら」を必要とする「投げられる」となります。アナウンサー時代、この方法にずいぶん助けられました。

ただ、「ら抜き言葉」に慣れ親しんでいるパパやママに「魔法の法則」は、すんなり受け止めてはもらえませんでした。

「ら抜き言葉」は、長い間「おかしい」と言われてきました。広辞苑によると、「東京方言では大正期から例がみえる」とあります。

「言葉は生きている」とも言われます。確かに日本語は時代とともに変わってきていますから、今「おかしい」と言われている言葉が標準的な言い方になる日がくるのかもしれません。

そうは言っても、「日本語の乱れ」が気になります。いわゆるコンビニ言葉、ファミレス言葉といわれる言い方では、ウエートレスさんがお料理を運んできたとき「…ニナリマス」「…デヨカッタデショウカ」「…ノホウヲオモチシマシタ」。

最近乱用されている「ダイジョウブ」や「ヤバイ」。自分の妻のことを「嫁」。「スゴイ綺麗」「スゴイかわいい」など「すごく」と言うべきところを「スゴイ」。時間を表す「分」の言い方も気になります。「3ぷん」と言うべきが「3フン」、「4ぷん」が「4フン」など挙げればきりがありません。

子どもたちにおはなしを届けるようになって十年になります。本を読んでいる間、子どもたちは熱心に聞いてくれます。大きな声で笑ったり、小さくうなずいたりと、それは楽しいひとときです。

朗読のあとはクイズで遊びます。『0』の正しい日本語の読み方」は、子どもたちに人気です。「れい」か「ゼロ」か？子どもたちは考えます。「正解は『れい』です。なぜなら『『ゼロ』は英語ですから」の説明で、教室には納得の声が上がります。

朗読の時間では、「美しい日本語」の大切さを伝え、体で覚えてもらおうと、「食べられる」「投げられる」「3ぷん」「4ぷん」・・・と子どもたちと一緒に大きな声を響かせています。

朗読のプレゼントは、子どもたちに物語が好きになってもらおうと始めたのですが、今では、子どもたちの笑顔が私の喜びとなり、定年後の人生を豊かにしてくれています。

昔の人は日本を「言霊の幸ふ（ことだまのさきはふ）国」と言いました。

私たちは、幸いにも言葉の豊かな国に暮らしています。言葉の楽しさ、美しさ、響き、言葉の中にあるこころを大切にして欲しいと願っています。

カット・中村賢次